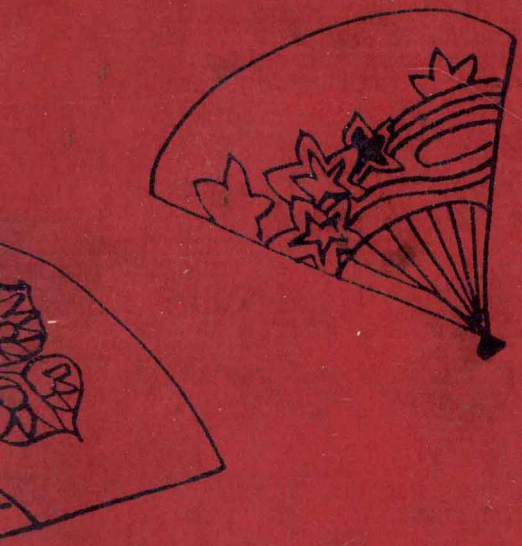

# 抛銀商人

南條範夫

筑摩書房

# 拋銀商人

昭和三十七年五月三十一日発行
定価　四二〇円

著者　南条範夫
発行者　古田晁
東京都千代田区神田小川町二ノ八
発行所　株式会社　筑摩書房
電話東京(290)七六五一(代表)
振替東京　一六五七六八
印刷　暁印刷
製本　鈴木製本
(落丁・乱丁本はお取替致します)

© 1962 N. Nanjō

目次


拋銀商人　三
鉄砲商人　四
人買商人　九
材木商人　一〇八
墮胎商人　一三
御用商人　一六
士族商人　一九
吳服商人　二三

# 拋銀商人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# 拋銀商人

## 一

多分の狡智と機敏な行動との為に、本名の菊蔵よりも、「目はしの利く蔵」などと呼ばれて、内心それを得意にしていたが、主家の没落と共に街頭に拋り出されてみると、どうあがいてみても、とんとうだつが上らなかった。

自分でも気付かぬ中に、随分人に憎まれていたし、警戒もされていたのだ。第一、それ迄、自分の腕でやっていた積りの仕事も、結局は、主家の背景があったればこその事だったと思い知らなければならない筈だった。

だが、菊蔵は、もともと、その主家の没落さえ、多少は自分に責任のあると言うことを、反省してみるような男ではない。

――だらしのねえ主人を持ったのが、おれの不運だったのだ、なに、これからは、おれの腕一本でやってみせる。

と、ほざいて、あれこれと手を出してみたが、何一つとして目が出ず、器用貧乏とでも言うのであろう、三十も半ばを越して、昔の朋輩は、ちゃんとした店を持って、忰や娘の成長を楽しみに働いていると言うのに、依然として、しがない仲介仕事で、けちな口銭を稼ぐのが、せい一杯だったのである。

――畜生、何とか一かま起せるような、うまい仕事はねえものかな。

と、顎の尖ってくるのにつれて益々鋭くなってきた凹んだ眼を光らして、古町から桶屋町にかかった時、ひょいと出会ったのが、顔見知りの唐通辞馮六である。

馮六は明国人だが、長崎には十年も前から住みついて、日本に帰化している男だ。日本語は勿論、オランダ語、ポルトガル語、エスパニヤ語からシャムロの言葉まで一通りは話すので、奉行所からも手当を貰って、頗る評判のいい人物だった。

ただ顔見知りと言う程度で、大した深いつき合いではないが、官辺にも貿易商人たちの間にも顔の広い消息通の馮六が、珍しく一人でいるところを摑えて、そのまま見遁すような菊蔵ではない。

「馮六どの、良い処で会いました。実はあなたに教えて貰いたい事があるので、二三日中にお願いに上ろうと思っていた処です、お手間はとらせません、ちょいと、ほんのちょいと――」

迷惑そうな相手を、言葉巧みに誘って、近くの小料理屋に連れ込んだ。

話の間に何か、儲け口になるような情報をつかんでやろうと言うのが目的だった事は言う迄も

ないが、教えて貰いたい事があると言った手前、どうでもいいような、しかし、話を引き出す手掛りになるような事を、適当にしゃべっている中に、思い掛けない開運への機会を掴むことになったのである。

話の緒として、菊蔵は、最近平戸にやって来て評判になっているオランダ船、パイレン号とフリフーン号の事について質ねたが、その序に、いつも疑問に思っていたことを、大した期待もなしに口に出してみた。

「馮六どの、南蛮人たちは、何千里の海を越えて、途方もない大きな船を、ああして日本までもってきおって、どえらい儲けをして戻りおりますが、自体、かれらの元手は、どのようにして集めるものでございましょうかな。儲けも大きいが、元手も大きい筈、それも、まかり間違って船が沈むかどうかすれば、一切合財なくなってしまう筈、そのような危ない仕事に必要な元手が、どうして容易に集まるものでございましょうかな」

馮六は、いつもの穏やかな笑顔を菊蔵の方に向けて、ちょっと愕いたような顔をした。この相手から、そんな質問を受けようとは、予期していなかったからに違いない。

「されば、私も、それを不審に思うて、質ねてみた事があります、何分、異国の商売の仕組みは、全く違いますので、よくは分りませぬが、何でもマグナ・ソキエタスとやら言う組合がありましてな、これが多くの人々から元手を集めるのじゃと言いますがな」

馮六の説明は、次のようなものであった。

オランダやポルトガルの貿易商人たちは、何人か集まってソキエタスと言うものを拵える。この仲間は、自分の全財産をもって、即ち、無限責任を負うて自ら貿易の仕事に当るのだが、これだけでは資金が足りないので、他に大商人や貴族や地主などから、金を出して貰う。これらの出資者はただ金を出すだけで自ら仕事はしない。損をしても、出した金以上には責任は負わない。つまり有限責任で、これがコンメンダと呼ばれている。ソキエタスとコンメンダとが結合したものが、マグナ・ソキエタスなのだ。成功した時の莫大な配当に釣られた連中が、後をたたないので、失敗して損をした例があっても、この形式で資金を集めるにはさして苦労はない、と言うのである。

馮六の説明はたどたどしかったが、要するに、ソキエタスは無限責任社員からなる合名会社的のものであり、コンメンダは有限責任の持分出資であるから、両者の結合したものであるマグナ・ソキエタスは、恐らく後の合資会社的の組織であったのだろう。その法的な性格も、歴史的発達過程も、勿論、菊蔵は充分に理解し得なかったが、この仕組みの本質的な部面を、彼の本能は、要領よく摑みとった。

「成程、働く力と勇気は充分にあっても、資金が足らぬと言う人々と、金はたんとあるが、自分で仕事に乗り出すのは億劫じゃと言う物持ちとを結び合わす、と言う訳でございますな」

「さよう、さよう」

「金を出す身にしてみれば、拙くいっても、出しただけの金を失うだけのこと、うまくゆけば、

ボロ儲けと言うわけ——まあ、いわば、賭博でございまするな」

「ま、そう言えばそうでしょう。然し、この頃は、船も立派になった。按針（水先案内）も確か。まして船主は自分の全財産をかけている事故、一所懸命に働く。そうそう損をすることもありますまい」

馮六の話を聞いている間に、菊蔵の頭の中に、新しい火が燃え上っていた。

「目はしの利く蔵」が何か新しいことを思いつく時には、いつもそのような火が燃え上ったのだが、これ迄は、それが余り大きな焔にならない中に消えてしまっていたのである。

——だが、こいつは違う、ものになるぞ。

菊蔵は、馮六と別れて紺屋橋を渡り、諏訪町の方に下りながら、頭の中の火をふうふうと吹き、それに薪を加えた。

新しい考えが、次ぎ次ぎに浮かんでくる。相変らず鋭く光っている瞳の中に、愉し気な色が、波頭のように躍る。

——細屋の名も、まだ使えるだろう、差当り、どうでも、あいつを使うより他はない。

細屋は、菊蔵の旧主家の称号である。

主人の喜斎は、既に死んでいたが、後家のみつと、忰の喜太郎とは、没落したとは言え、一通りの生活はしていた。

慶長の初期と言っても、ほんの七八年前の事だが、朱印状を受けて、安南貿易に相当の活躍を



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

した実績を持っている。この長崎の大商人たちの中にも、古い知己は多い。
――ちっ、もう少し、あの後家どのの御機嫌をとっておけばよかったな。まあいい、悪い話を持ち込む訳ではなし、何とでも説き伏せて見せるわ。
闘志が涌けば、悪知恵はいくらでも出てくるし、舌の回転は絶妙になる男である。
炉箱町にひっそりと暮らしていた細屋の未亡人と遺児とを訪れて、殊勝気に無沙汰の詫びを述べたが、さてと一膝乗り出した。
「ところで、坊様、わしも大旦那の御恩を受けた身、いつかは一度、細屋のお店を再び起して、亡くなられた大旦那に草葉の陰で悦んで頂きたいと思うておりましたが、いつも事志と違うて、思うようになりませなんだ。然し、どうやら時節が参りました。今度は、御恩報じが出来るつもりでございます」

## 二

朱印状を受けるのには相当の激しい競争があるが、過去に於てそれを受けたことのある実績は、何と言っても有利だ。
――細屋の名で、もう一度御朱印状をお受けなされ。
と菊蔵は、勧めた。朱印状を受け得たとしても、船を備(とと)える資金も、積荷を集める資金もありはせぬ、喜斎どのが死ぬ前に、せめてもう一度だけと、あれ程馳せずり廻られたのにどうして

も、その元手を集めることが出来なんだ、今更、この私たちがどう動いても、どうにもなるものではありませぬと、みつと喜太郎とが口を揃えて言うと、待っていたと許り、菊蔵が、己れの計画を話し出した。

「何の御朱印状さえ手に入れば、あとはこの菊蔵が舌一枚で、要るだけの元手は必ず集めてごらんに入れましょう。この長崎には、たんとお宝を持ちながら、それに利を生ます手段を知らず、さりとて、表立って金貸業を営むのも体面上できぬ、何かうまい儲け口はないかと思うている人たちが、沢山おります。この人たちを説いて廻れば、大丈夫、元手は集まります。餌は、返し一倍——船が南蛮から無事に返ったら、出して呉れた金を倍にして戻すと言う約束で釣れば、欲の皮のつっ張った連中、さいころの目をふるつもりで、財布の紐を解きまする」

諦めたつもりではいても、心のどこかで昔の栄華が忘れられず、それが亡夫亡父の面影と結びついて、強い郷愁となっていたみつと喜太郎とが、到頭、口説き落された。

資金がうまく集まらず、計画が挫折したとしても、元々だ——とも考えたのだ。

だが、菊蔵は、この第一段階の成功に自信満々、その日からこま鼠のように、長崎の街中を走り廻った。

何よりも先ず朱印状を手に入れることだ。

朱印状の発行は、幕府の閣老本多正純の所管。作成の担任者は、慶長十二年末迄は、豊光寺承兌であったが、その没後は円光寺元佶である。

この坊主、賄賂が利く。

最低、白銀一枚（銀四十三匁一包）と言われているのを、白銀三枚と、南蛮船積載の縮緬一反とを、奮発した。むろん、細屋の後家を表面に引張り出し、亡き喜斎の親戚一統を拝み倒し、細屋再興の名で貰い集めた金で調えたものである。

贈賄に加うるに過去の実績が物を言って、出願後二ヵ月で、長崎奉行所の手を通じて、朱印状を与えられた。

自日本到
柬埔寨（カンボジヤ）船也
右
慶長十四年己酉小春十一日
御朱印

横二尺一寸七分、竪一尺五寸三分の大高檀紙に認められた朱印状を押し戴くと、菊蔵は、

「南無、大旦那さまがお守り下されましたぞや、これさえあれば大願成就」

と、みつと喜太郎に披露するや否や、再び町中に飛び出し、コンメンダ、コンメンダと起死回生のお経の如く唱えながら、第二段の工作にとりかかる。

金を出させるには、信用が第一と、喜斎が生前、交友関係にあった末次孫左衛門を、鍛冶町に訪ねて、旧主家の再興の涙物語一席、まんまと、銀三貫目（銀五十目＝金一両）を出資させた。

孫左衛門は親父の勘左衛門時代から、朱印状を受けて自ら南蛮貿易に従事し、鍛冶町の乙名(おとな)をつとめている身、他人の商店に資金を出す必要はないし、菊蔵が狙っている出資層とは違うのだが、誘い水としては、必要なのだ。

――末次殿さえ一口乗って下されました。

菊蔵は、目星をつけておいた資産家たちを説いて廻った。

貸借は、菊蔵個人と、出資者の間に結ばれる。その条件は、この菊蔵の協同者である細屋喜太郎の艤装する朱印船が半年の後、柬埔寨から帰朝した時、出資の倍額を返済する。但し万一、右朱印船が航海中事変を生じた為帰航しない時は、返済の義務はないと言うのである。

――船が戻っても、充分の利益がなかった時はどうするか。

と言う質問に、菊蔵はきっぱり答えた。

「船さえ戻りましたならば、たとえ利が薄かろうとも、私も細屋も、身代傾けても約定の通り、御出資の倍額お返し致しまする」

菊蔵には勿論傾けるほどの身代なぞありはしないが、凹んだ瞳にぎらぎらと焔を燃やして、自信あり気にきっぱり言ってのけるのを見ていると、ふっと引込まれるように人々は信用した。

難破、沈没、鹵掠(ろりゃく)、海損の危険は、勿論ある。この場合は、出資全損となるだろう。だが、今迄、朱印船の圧倒的多数は、無事に戻ってきている、とすれば出資金が僅か半歳にして倍になる好機会が目の前に、さし出されたのだ。

大金を賭けるのは、危ない。だが、自ら一仕事する意欲も行動力もない者が、その保有する資金の一部を投資してみる気になるだけの魅力は、充分にある。

よく言えば冒険的精神、悪くみれば虫のいい投機心を、この長崎の町人たちは、大なり小なり持ち合わせていた。それは、町の伝統的性格なのだ。

最低五百目から、最高六貫目までの出資者が、合計十二名、総額四十貫の銀子が集まった。

長さ十二間、幅四間、七十万斤積みの船を借入れた。朱印船としては、最も小型だが、資金の関係上、已むを得ない。

蒐集した搭載貨物は、銅、鉄、小刀、万器物、蒔絵の類、扇子、傘、鏡、屏風、麦粉、食料品などである。

水夫頭(かこがしら)には、菊蔵が古い仲間の久衛門と言うのを選んだ。酒癖が悪いのが祟って、長らく職を離れていたが、その操舵の術は人に認められていた男である。

菊蔵も、自ら、行を共にすることにした。貨物の販売、南蛮物品の購入等一切に当る為だ。これは、喜斎の生前、二度も渡航していたから、自信があったし、乾坤一擲(とき)の秋、他人に任せられぬ事だった。

細屋の再興朱印船は、慶長十四年八月十六日、長崎を出て、肥前五島に風を待ち、二十日その地を離れた。一たび北に向かい、中国大陸沿岸に近づいてから南下するのは、むろん、貿易風を利用する為である。

半歳の間、この細屋船の帰来に首を長くしていたのは、みつと喜太郎のみではない。全く新しい投資形態に、思い切って資金を投じたものの、いざ船が出てしまうと、今更のように自分の出資金の運命が不安になり、ああ止めておけばよかったと、祖先の仏壇の前で溜息をついた吝(けち)なくせに投機心だけは一人前の多くの出資者たちも、同様だったのである。

が——冒険は、成功した。

翌十五年二月、未だ肌冷たい暁の風を衝いて、細屋船は、立派に戻ってきたのだ。

舶載してきた貨物は、生糸、縮緬、綸子、緞子、砂糖、薬剤、伽羅、丁子、虎皮、鹿皮、陶磁器、黒檀、珊瑚など。

儲けは、莫大であった。

出資者には、約束通り、倍にして、資金を返却した。

「細屋は、よい協力者を持った、あれで立直る。以前の細屋以上のものになるだろう」

長崎の町中に、そうした賞讃の声が流れた。

菊蔵は一躍して大いに男を上げ、彼の考案した資金蒐集方法が、口から口へ伝えられた。模倣者の続出したことは、当然である。

誰よりも先に、末次孫左衛門が、次の末次船を出す時に早速、この方法をとった。自家だけでも必要な資金に不足を感ずる資力ではないが、資金は多い程よいのだ。危険の分散にもなる。その上、末次船がシャムに向かうと聞いて、一口乗せてくれと申し込んでくる出資者が何人もあっ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.